法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-02

ナポレオンの「国富論」ノート

OSABE, Shigeyasu / 長部, 重康

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei University Economic Review / 経済志林
(巻 / Volume)
44
(号 / Number)
4
(開始ページ / Start Page)
173
(終了ページ / End Page)
217
(発行年 / Year)
1976-12-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008365

ナポレオンの『国富論』ノート

長部重康

ナポレオンは一七九一年、二二才の折にスミスの『国富論』を読み、その読書ノートを残している。が、一九世紀末に出版され、今日でもなおナポレオンの幼年、青年時代の研究にあたっては基本史料とされている、フレデリック・マソンとギド・ビアジの著作『知られざるナポレオン』[1]は、彼の生年から二三才（一七九二年）までの未公刊の手稿を系統的に集めて解説を付しているものの、この「国富論ノート」の存在にはふれていない。また管見のかぎりでは、これをとりあげた著作もないように思われる。[2]そこで『国富論』特集の機会を利用して、この未公刊の手稿を解読してその紹介を付し、読者の便に供することにしたが、あわせて、フランスにおける『国富論』受容の経緯の一端を綴って責をふさぐことにしたい。[3]

『国富論』の仏語訳

『国富論』には現在までに四種の仏訳があらわれているが、[4]そのもっとも古い版は、フランス革命に先だつこと一〇年の、一七七八～一七七九年に小型一二折、四巻本で刊行されたもので、訳者は匿名である。筆者には未見であり詳細をあきらかにしえないが、この存在はパリの国立図書館の蔵書目録により確認される。興味深いことは、

オランダはハーグで発刊されていることである。このため、あまり影響力は持ちえず、通例の経済学史においても、その存在は無視されているといってよい。

つぎにあらわれたものも、やはり匿名氏により、スイスのイヴァルドンで一七八一年に出版されている、三折六冊本である。この末尾には、フランスの王国検閲官による出版承認が一七七九年の日付で付されていることから推察されるように、おそらくは、第一の例と同様にこの版についても、検閲問題のために訳者の匿名と外国での刊行が必要とされたのであろう。この版は東京大学経済学部が所蔵している。パリ国立図書館の目録によれば、訳者はブラヴェ師であるとされる。そして、一八八八年には、パリとロンドンでブラヴェ師の名をあきらかにした版があらためて刊行されることになった。これは小型八折の四冊本である。

ジャン・ルイ・ブラヴェは一七一九年、ブザンソンの生れで、はじめ、ベネディクト派の修道院に入り、僧職の修業を積んだがすぐに還俗し、やがてルイ一五世のもとで権勢を振い、ポーランド王の血筋をひくコンティ公の図書館長に収まり、同時に王国検閲官の任にあった人物である。最初匿名でスイスにおいて彼の訳書が出版された事情は、あるいは、この社会的立場から来たものであったかも知れない。彼はすでに一七五五年、当時のイギリス農業技術の紹介をこころみた『近代農業論』[5]を著わした農学者でもあったが、一七七五年にはスミスの『道徳感情論』[6]を訳出している。が、その訳業の評判ははなはだ芳しくなかったようである。

ブラヴェ版『国富論』に付せられた出版元の序言は、「本書は、『道徳感情論』の著者がとりあげるに足るほど、重要な目的をもっていた。……グラスゴウ大学元教授スミス氏は、諸国民の富の性質とその原因にかんする、深くかつ輝しい研究を発表された」とその重要性を強調し、さらに「この研究がイギリスで公刊された際に、つまりその事実が専門誌をとおしてパリに伝えられた際に、勇を鼓して訳出にかかり、さらにはその出版に踏みきることを

ひそかに決意するものがいなかったとすれば、世間にたいするわれわれの怠惰と不正とを責められてもいたし方あるまいと考えた」とのべて、この著作がイギリスで発表されて以来、フランスにおいても大いに注目されていた事情をつたえている。

このことは、ブラヴェ版に遅れること一一年、大革命の開始の翌年にあたる一七九〇年には、さらにジャン・アントワーヌ・ルシェールの訳本が発売されたことからもうかがうことができよう。ブラヴェがさほど有名ともいえない農学者で、かえって訳業のまずさで世にきこえていたにすぎなかったうえ、出版元も零細なところであったために、この版の訳書の流布範囲もごく限られたものにとどまったと推定される。が、ルシェールは当時すでにかなり世に知られていた詩人であり、またのちに『人間精神の進歩の歴史』(7)を著すことになる百科全書派のコンドルセ侯爵がこの訳書の註解の労をとっていることからもあきらかなように、当代一流の知識人の仲間に加わっていたため、社会的な影響力という点ではブレヴェ版を大いにしのいでいたとみてよい。ナポレオンが、パリから南東に五五〇キロの、グルノーブルに近いローヌ河畔の小都市ヴァランスで手に入れた訳書も、発売後まもなく地方の小都市まで出まわっていたと思われる、このルシェール版であった。

ルシェールは一七四五年にモンペリエで生れた。彼が世に出るきっかけとなったのは、一七七〇年の王太子（のちにルイ一六世）とマリ・アントワーネットの婚礼にさいして、これを祝う詩を発表して一躍有名になったことによる。早速財務長官チュルゴーの庇護を得ることに成功し、財務関係の下僚の地位を約束されたのである。よく知られているように、スミスは一七六四年から六六年にかけてバックリュー侯爵についてパリ、ツールーズ、ジュネーブなどを旅し、多くのフランスの哲学者やフィジオクラットらと親しい交際を重ねた。すでにツールーズ滞在中に『国富論』の準備にとりかかっていたといわれるスミスにたいして、ケネーとならんでこのチュルゴーも大いに

影響を与えた。(8) ルシェールが『国富論』の訳出にあたったのは、一つには、このチュルゴーとの関係によるものであったが、彼が世に出たのが一七七〇年であってみれば、ヴェルサイユ宮のサロンでのスミスとの出会いの可能性は、一足違いで期待できないことになろう。

ルシェール版も、先のブラヴェ版と同じく英文第四版を底本にしており、小型六折本で全五巻、ただし最後の一巻は百科全書の「経済学」の項目の執筆を担当したコンドルセ侯爵の註解にあてられている。もっともこのときには第五巻の刊行は間に合わず、これが出たのは革命歴Ⅲ年の、一七九四年であった。コンドルセ侯夫人は、すでに別の女性と共訳の形で『道徳感情論』の仏訳を発表しており、夫妻でスミスの紹介に功があったといえる。さて、訳者の緒言は、当時のフランス社会で『国富論』の訳出がいかに待望されていたかを次のように物語っている。

「本書の仏訳が望まれて久しい。とくに今日では国民議会による公共財産再興の手段模索のために、その要請がますますたかまっている。行政制度相互のあいだの小止みない衝突とともに、長期にわたる相次ぐ浪費や汚職によって、公共財産は浸蝕されているのである。自由と所有という神聖なる権利を遵守する政府のもとに生き、幸せを恋い願うものは、何人といえどもこの研究のなかに、国家の長たるものを統べるべき不変の原理を見い出すであろう。」

このように、『国富論』仏訳の契機は、なによりも、絶対王政末期の支配体制の動揺、わけても行政、財政の紊乱を立てなおすための実践的処方としての期待にあったといえる。綿業および毛織物工業を中心とする、イギリスにおける目ざましい国民的産業の発展に比して、絶対王政下のフランス産業の発展は弱く、両国の生産力格差はますます拡大しつつあった。そして、オーストリア継承戦争と七年戦争の敗北の結果、フランスは世界市場の争奪戦においてイギリスによって決定的な優位を奪われてしまった。こうしたイギリスの経済的優位性に比較して、フラ

ンスの後進性をもたらした原因は、なによりも両国間の政治経済体制の相違にある、と考えられるにいたる。「イギリスは、世人に完全なる社会経済制度を与えている、という点でわが国よりも優れている」とルシェールは、先の緒言をつづけている。当時のフランスの開明的な知識人にとっては、イギリスの政治、経済制度の優越性は自明のことであり、もはや末期的な情況をさらしていたフランスのアンシャン・レジーム「旧体制」変革のために手本をあおぐのは、イギリスを置いては他になかった、といってよい。スミスの『国富論』が、たんに経済理論の探求と歴史的例証の開示にとどまらず、同時に豊富な政策的提言に満ちていたことが、大いにフランス知識人の期待を集めえたゆえんであったろう。

若き日のナポレオンが『国富論』をひもといた一八九一年とは、こうした「旧体制」が倒れつつあり、すでに新たな時代が始まっていた時代であった。そしてなおイギリスが一つの手本を示してくれるかに思われていた時代ではなかったか。彼が『国富論』をいかに読んだか、は後に残して、とり急ぎ革命の進展のなかで、わが訳者ルシェールの運命をたどってみよう。

ルシェールは、先にみた緒言からもうかがえるように、開明的な立場をとっていた。思想的にはヴォルテールの弟子をもって任じており、ルソーにかんする小著もあらわしている。革命の勃発には大いに心をおどらせて隊列に加わり、『パリ新聞』"Le Journal de Paris" に拠って立憲王政支持の論陣を張った。が、革命のほうは彼の思想とはおかまいなく、ますます急進化していく。そして山岳派のイニシャティブの確立による革命独裁の進展とともに、一七九三年末、彼は反革命容疑者法の適用をうけて逮捕され、サント・ペラジーの牢獄につながれる身となった。やがてサン・ラザールの監獄に移され、半年以上の幽閉ののち、一七九四年、テルミドール七日の六月二五日、他の三七名の囚人とともにコンシェルジュの断頭台に登ったのである。奇しくも彼の訳書註解をしたためたコ

ンドルセもジロンド派として投獄され、同じ年に毒をあおいで自から命を断っている（毒殺説も根強い）。また、第四の訳書をのちにあらわすことになるジェルマン・ガルニエも、立憲王党派であったために、これより早く一七九二年八月のテュイルリ宮襲撃の日に逮捕状が出たが、かろうじて脱出し、スイスに逃げおおせたのであった。

革命期を無事に生き抜いて一八〇九年にパリで亡くなっているブラヴェ師が、どのような思想的立場をとったかはつまびらかではないが、いずれにせよ革命の渦中でさほど目立った働きをしていなかったことは確である。ルシェールとガルニエは明確な立憲王党派であり、一人は断頭台の露と消え、他は国外亡命を余儀なくされ、コンドルセもまた革命独裁にはうけ入れられるところとならずに自から命を断っている。これは『国富論』のフランスへの紹介者たちの、ある種の政治・思想的立場の共通性を示唆しているようにも思える。古典派経済学とジャコバン主義とのあいだに横たわる深い切れ目を象徴しているかのようである。

このなかでは一七五四年、オーセーヌ生れのジェルマン・ガルニエがもつとも若く、一八二一年まで存命している。しかも、その生き方はオポルチュニスト（日和見主義者）というにふさわしく、もっとも彩に富んでいる。彼は、パリのシャトレー裁判所の検察官として世に出た法律家であった。やがてルイ一六世の伯母にあたるアデライデ夫人（Mme Adélaïde）の秘書官となり、たちまち社交界で頭角をあらわした。革命期には、すでにふれたように立憲王党派の立場に立った。一七九二年には国王から司法大臣の椅子を示されたがこれを断わったが、折しもチュイルリー宮の襲撃にあってパリ・コミューンが成立したため、スイスに亡命し、革命の動きから遠ざかっていた。この七カ年つづいたスイスでの亡命生活のあいだ、彼は読書にあけくれ、後の学者としての基礎を作ったといわれる。このときにはゴドウィンの『カレブ・ウィリヤム』の訳出をし、また『経済学原理提要』[9]を発表した。一七九九年にいたり、ブリュメール一八日のナポレオンのクーデターが成功した後、パリに戻り、王党派を廃業してナポレオ

ンに鞍替してみとめられ、ただちにセーヌ・エ・オワーズ県知事に任命された。やがて上院議員にも選ばれ二年にわたって上院議長をつとめ、伯爵の位を得た。ところがルイ一八世の王政後古が成功するや踵を返して王党派に復帰して国務大臣の任につく、といった老獪な政治家として幸運な出世街道をあゆんだ人物であった。

経済学者としても当代一流であり、フィジオクラットの流れをくみ、またアダム・スミス派とみなされ、いわばスミスのフィジオクラット的解釈の旗頭として経済学史に名を残している。主著としては『割引銀行史』[10]、『貨幣史』[11]などがあげられる。

先にみたブラヴェ版とルシェール版は、ともに経済学の専門家の手によらずに訳出され、イギリス古典派経済学のフランスへのはじめての紹介、といういわば先駆的な点にいみがあるにとどまったといってよい。というのは、十八世紀の古典派経済学の発展がもたらした新しい概念や専門用語を、充分学問的なフランス語に移し変えるには大きな困難がともない、かなり通俗的な訳文に終らざるをえなかったからである。

これに比べると、一八〇二年、六折本で発行されたガルニェ版は、はじめて専門的な経済学者がおこなった訳業であり前二版の先駆的な仕事を参考にすることもできたため、訳文の内容はきわめて質がたかくなっているといえる。さきの『国富論』の要約という色彩の強かった、『経済学原理提要』が発表されて六年後にしての、完訳本の出版であった。これは彼の亡命生活の成果といえぬこともないから、春秋の筆法をもってすれば、優れた『国富論』をフランスに与えたのはジャコバン主義だ、ということになろうか。

ガルニェはその版に付したスミス解説のなかで、フランスの経済学者（通例フィジオクラット）とスミスの原理とを比較してその相違を次のように要約している。[12] つまり、「経済学とは、ある対象物を統べる法則の認識の上になり立つ自然科学である」とみなしているのが、フランスの「経済学者」なら、スミスはこれとは逆に「この対象自

体の改善をはかり、可能なかぎり気高い地点で対象物の稼動をはかろうとする道徳科学である」と考えている、というのである。そして、ガルニエもまた、スミスの原理を活用してフランスの富をイギリスのそれなみに引きあげたいと願っている、と結んでいる。ここにもまた、先にみた、ブラヴェ、ルシェールの両先達とまったく軌を一にした、イギリスおよびイギリス古典派経済学にたいして実践的処方を求める態度をみてとれるのである。

しかしこのガルニエ版も、フランスにおける古典派経済学の受容がすすみ、J・Bセイやシスモディーなどのスミスの祖述者が輩出するに及んで、次第に粗が目立ってこざるをえなかった。

とくにJ・Bセイは、一七六七年にリヨンの商人の子に生まれ、勉学のためにイギリスに送られ英語に親しむとともに、当時のイギリス産業、商業の目ざましい発展を目のあたりにして、その運動の解明に夢中になったといわれる。その後フランスに戻ってから、革命勃発前に、たまたま『国富論』を手にした二〇台半ばの彼は、経済学の本格的な研究を志ざすにいたり、一八〇三年には『経済学概論』[13]を発表し、スミス研究の見事な咀嚼ぶりをしめしている。彼はパリの工芸学校(Conservatoire des Arts et Metiés)の経済学教授の任にあって、『国富論』の研究、教育にあたっていた。英国の経済事情と言語とに精通し、古典派経済学の研究に打ちこんできたセイによる、フランス語の経済学の概念および用語の改革の意議は大きかったのである。

こうした成果を前提に、いよいよブランキ公爵の手でガルニエ版の全面的な改訂が企てられ、やがて一八四三年に出版された。[14] 彼の序文によると、この改訂版のねらったところは、大きくわけて三点あった。まず、訳文の訂正にあたっては、とくに stock, currency, circulating medium, legal tender などの概念の吟味に留意したという。これらは、当時まだ充分完成されたフランス語には移されていなかったからである。つぎに、これまで英・仏両国で進められた『国富論』研究の豊富な成果を充分もることに意を注いだ。ブキャナン、マッカロック、マルサス、リ

カード、シスモンディ、セイなどの註解が、ことに克明にとり入れられている。ブランキは、とりわけブキャナンの註解のすぐれていることを強調し、このブキャナン版はパリに一部しかなく、手に入れるのに二〇〇フランもした、と書いている。そして第三に、この当時の印刷技術の大幅な発展のおかげで、便利な大型二冊本にすることができたことを誇っている。そして最後にこうした優れた特徴をそなえた「本書が、ヨーロッパにおける経済学研究の出発点をなすことは、今後とも変ることはあるまい」とその自信のほどを披瀝している。『国富論』の仏語訳におけるガルニエ・ブランキ版の定訳としての地位は、今日でもいささかもゆるいではいない。その生命は、はや一三〇年以上の長寿を数えているのである。

ナポレオンのヴァランス時代

ナポレオンが『国富論』を読んだ時期は、「国富論ノート」に記載されている日付から明らかなように、一七九一年七月、ヴァランスにおいてであった。先にふれたフレデリック・マソンとギド・ビアジの労作『知られざるナポレオン』に主として拠りながら、この時期のナポレオンの姿をたどってみることにする。

フランスの奨学金を得てパリの士官学校に学んだナポレオンが、一六才で卒業して最初に砲兵小尉として任官した地が、ラ・フェール（La Fère）軍団の駐屯地ヴァランス（Valence）である。卒業のときの成績はあまり芳しくなく五八人中四二番であったという。このために辺鄙の地に追われたのであろうが、任官後一年たって試験があったが、このときには二、三番を下らなかったといわれる。ルードウィッヒの『ナポレオン伝』[15]によると、「そのころ、彼の心には三つの衝動がたがいに渦をまきつつ、多感な精神をとらえていた。」すなわち「仲間を軽蔑し、かつ利用すること。貧乏から脱却すること。他人を支配するために猛烈に勉強すること」であった。コルシカの貧乏

貴族の次男に生れ、かろうじて宗主国フランスからの奨学金を得て、幼ない時からフランスの上流階級の子弟の集まる兵学校に留学していたナポレオンは、一〇年にも及ぶ人種偏見と貧困の苦しみに耐えてこねばならなかった。彼の夢は、コルシカに暴動を起してフランスからの独立を成しとげ、その王位につくことであった。金もなく、社交家でもなかったナポレオンは、幼ないころから読書と執筆にその夢をたくして、自分を支えてきたといえる。これまでの規律にしばられた窮屈な士官学校の生活からはじめて解放されて、連隊勤務のなかで自由な時間をもつことになったナポレオンは、ますます読書に熱をあげた。ヴァランス勤務の頃に読んだ書物についても、浩瀚なノートが残されているが、アテネやスパルタの国制史、エジプト、カルタゴの歴史、砲術や攻城の軍事学、天文や地質の研究、あるいは中国やインドについての地誌や風習など、まことに多彩である。また自殺論や君主論、砲兵の配陣、あるいはコルシカ問題について、一〇篇以上の覚え書を残している。とくに、ジャン・ジャック・ルソーの思想とイギリスの名誉革命の歴史には強く惹かれるものがあったらしく、このころのナポレオンは、ルソーの生活態度を真似、「人間の幸せは土にある」と書いている。

一七八九年の七月一四日、パリ民衆のバスチーユ監獄の襲撃によって大革命の火蓋が切って落されるが、ナポレオンはコルシカ人の眼でこの革命を冷静にながめる。コルシカ独立の日が到来したのである。地方の小都市ヴァランスにも革命の波は押よせ、市民の暴動がはじまり、ナポレオンも軍の命令で警備に出動する。彼は民衆の暴徒にたいしてはいささかも同情を持ってはいなかった。問題はコルシカ独立が可能かどうかである。パリで民衆が押しかけたときに、王は三色旗を守ると約束したことを知って、「自分なら発砲させただろう」[16]と記しているほどである。

そうこうするうちにコルシカの母親から家計の窮状を訴える手紙がまい込んだ。すでに父親は一七八五年に胃癌でたおれ、わずかばかりの桑畑にすがってほそぼそと家計を維持してきた母親は、たまたまこの頃、有力な援助を

与えてくれた保護者が亡くなり、途方にくれたのである。ナポレオンは、コルシカ独立への思いも抑えがたく、早速休暇をとって、九月には一〇年ぶりにコルシカに帰郷した。

コルシカに戻ってみると、革命の波はまだこの小さな島にまでとどいてはいない。兄のジョセフ、弟のルシアンとともに革命を告げる政治運動にとりかかり、多くの革命クラブの組織化に没頭した。しかし、このコルシカ独立への期待も、コルシカに他の県と同等の権利をみとめる、との国民議会の決定で、無念にもついえ去った。追放から解かれて祖国に戻った老愛国者パオリにむかって、ナポレオンは激しい情熱をこめて武装蜂起の計画を説きつけたが、帰ってきたのは冷たい返答のみであった。

約一年間のコルシカ滞在はまたたく間に過ぎ去り、四カ月の延長がみとめられて、さらに一〇月一五日まで延びていた休暇の期限もとうに過ぎ去ってしまった一七九一年一月、一三才になった弟ルイをともなって傷心の思いでフランスに戻った。転勤を命じられていたため、ディジョンに近いソーヌ河畔のオーソンヌ（Auxonne）に落ついたときには、二人合せて、わずか八五フランの所持金しかなかったという。スタンダールはこのころのオーソンヌにおける彼の部屋の模様をつぎのように書いている。

「ボナパルトは離れのほとんどむき出しの部屋にいた。家具といってはカーテンのついていないベッドが一台、椅子が二脚、窓のある壁のくぼみにテーブルが一つ置かれているだけである。テーブルの上には書物や紙がつみ重ねてあった。弟のルイは隣の書斉の床にマットを敷いて寝ていた。」[17]

ナポレオンは、このルイに数学と地理とを教えていたが、ルイはのちに竜騎兵大佐となり、ナポレオンが皇帝になると、一八〇六年から一〇年までオランダ王の位についた。その息子が後のナポレオン三世である。この弟の教育のために、そしてコルシカ独立運動のためにも、ナポレオンはとにかく金がほしかった。折しも、近くのリヨン

の学士院で一、二〇〇フランという大枚の賞金をかけて論文を募集していたことは幸運であった。「幸福のために人間に教化すべきもっとも重大な真理と感情とを定議せよ」というのが論題である。彼はさっそくこれに応じることにして準備をはじめた。が、ちょうどこの年の四月一日に、あらたに砲兵軍団が設立され、これにともなってナポレオンはもとの古巣であるヴァランスへ転勤を命じられ、弟の教育上オーソンヌを離れ難かったナポレオンも、六月にはヴァランスに着任している。したがって、懸賞論文の準備が開始された四月ごろの読書ノートに付された地名はオーソンヌであるが、六月以降、論文締切の八月末までのノートには、ヴァランスと記されている。ヴァランス、一七九一年七月、の日付がある「国富論ノート」は、このように、なんとか資金を手に入れる必要があったナポレオンが、懸賞論文に応募するためにかなり集中して準備をした時期に作成されたものであることがわかる。

ところで、この頃のナポレオンの読書については、スタンダールが残している次のような指摘は興味深い。

「たしかにナポレオンは、ヴァランス、オーソンヌその他でたくさんの本を読んだ。しかし、この熱烈でたえず未来を夢見ている魂にあっては、もっとも厳粛な書物でも、小説が卑俗な魂にあたえる効果以外のものは生みださなかった。これらの書物はナポレオンの情熱的な感情を目覚めさせ、あるいは刺激した。だが完全に論証され、その後に人間の生き方のよりどころとして役立っている偉大な真理のかずかずを、ナポレオンの記憶に残したであろうか？」(18)

要するにスタンダールの言いたいことは、ナポレオンが多くの著作を研究したことは事実だとしても、それが彼の人間としての生き方に、あるいは「統治学」に直接影響を及ぼしたことはない。彼は、学習による知識とは独立した直感的な理解に鋭いからだ、というのである。たしかに、彼の読書ノートを読んでみると、とくにこの懸賞論文の準備のためのノートは、目的意識をもってかなりの力を注いでいた時期に作成されたものであったにもかかわ

らず、主として抜き書き、それも著者の思考を体系的に摂取しようとするものではなく、やや恣意的な抜き書きが大部分で、彼自身の感想なり、印象なりの記述がほとんど見られないといってよい。このことは次節で「国富論ノート」を例にして、あきらかにされよう。本は本、自分の考えは考え、とはっきり区別しているかのようである。もっとも、この時期に書き残しているルソーの『人間不平等論』のばあいには、感が高ぶって、「これは読むに耐えない」と書きなぐり、放り出し、つづく二頁にわたって反論でうめている例もあるにはある。が、要するに均衡のとれた、著書との対話をとおして思想を摂取していく、といういわゆる読書の正統的な方法からはみ出していることだけは事実である。ところで、学術的用語の抜き書き帳を作るなどして、せっかく周到な準備をして執筆にかかった懸賞論文も、感情の赴くままに筆が一人すべりしてしまったようである。広い読書によって獲得した知識を適当にちりばめる、などという器用な芸は発揮できなかったとみえる。そしてこれに『国富論』が登場することはついになかった。このため、手稿が散逸してしまったことは別にして、今日にいるたまで、彼がこの時期に明確に『国富論』を研究したという事実が忘れられしまったのである。

この論文準備の成果をみる前に、ふたたびナポレオンのあとを追うことに戻ろう。一七九一年の六月、ヴァランスの新らしい軍団に移り住んだナポレオンは、この軍団のなかでももっとも積極的な革命支持派となった。ここに移ってまもなく、六月一〇日、逃亡をはかったルイ一六世がヴァレンヌで捕えられ、パリに引きもどされたという知らせが入ると、軍の動揺がはじまり、王党派と愛国派とのあいだの分裂が広がった。彼は下士官を集めては、パリから届く革命派の「愛国的新聞」を読んで聞かせ、熱烈な革命支持の演説をぶってまわった。ナポレオンに鼓舞された愛国派の下士官たちは、七月三日には、国王逃亡のさいに近くの各県で結成された二二の「憲法友の会」の合同集会に参加して、革命の深化を議決し、七月一四日、バスチューユ襲撃の記念日にはあらゆる市政関係者とと

もに、市民の暫いをたてたのである。

ナポレオンは七月二七日、オーソンヌの友人で陸軍理事をしていたナンダン（Nandin）あてに手紙を書いている。

「ヨーロッパは、人間を統べる元首のそれと、牛や馬を統べる王のそれとに分たれている。前者は完全に革命なしとげており……イギリス、オランダである。後者は、国民に完全な憲法を与えるのを恐れている。彼は支離滅裂な思考に陥り、フランス帝国を破滅におとし入れるであろう。……この国は火と熱でみちている……二週間前に近くの三県の二二の組織が集まり、国王処刑の請願を採択した。……一四日のお祭に、私はオーソンヌの愛国者に挨拶を送った。」

ナポレオンが『国富論』を読んだ七月とは、こうした革命的昂揚のなかで、彼が積極的な政治運動にとびまわっていた時期であった。この手紙の中で、革命の先達としてイギリスに敬意をささげている箇所は、あるいは『国富論』を読んでの、かすかな痕跡というべきか。

さてここで、このオーソンヌ、ヴァランス時代の読書ノートを簡単にみておこう。『国富論』が、どのような読書の傾向のなかで読まれていたのか、をあきらかにしておきたいからである。

まず、ナポレオンが論文執筆の準備に力を注いでいたことをうかがわせるものに、先にもふれたように、「学問用語や外国語の、自分の知らなかった、表現力に富んだ単語」を蒐集する語彙集がある。彼がそれに、「表現ノート」（Cahier d'expression）という題をつけていたことからもあきらかである。これは一七九一年四月一〇日、オーソンヌにはじまり、八月一日が最後の日付となっている。また、本来の読書ノートのなかで日付が付されている一番最後のものが、七月の「国富論ノート」であったことから、おそらく、八月に入ると論文執筆に忙しく、読書は中断していたのではなかろうか。

ナポレオンは読書ノートに一連番号を打っていたようである。この時期に該当するノートは、オーソンヌ、四月四日付の『ソルボンヌの歴史』についてのノートからはじまるが、これには第一五番と記されている。がのちにみるように、番号の付け方は、整然というにはあまりに遠く、同じ番号のなかに別々の二つの著作が入れられてあったり、逆に一冊の本が二番号にわたって扱われたりしているのである。また、日付と番号とのつながりも、たとえば第一八番が七月二四日付であるのに、第二〇番は五月二二日付であったり、あるいは第一九番は先の「表現ノート」に付されている、といった具合で一貫性を欠いているといわざるをえない。他に番号が付されていないものに、ルソーの「人間不平等論ノート」と、「国富論ノート」がある。『知られざるナポレオン』では、後者についてはその存在が語られておらず、前者については、あまりはっきりとした根拠は与えられていないが、最後に、つまり懸賞論文の草稿の直前におかれている。いずれにせよ、『国富論』と『人間不平等論』とが同じ時期の、一七九一年七月に読まれたことはほぼ間違いない。

読書ノートでとりあげられている著作は、『国富論』を入れて九点にのぼる。以下に簡単にこれらの書物を紹介しておく。

第一五番ノート。デュヴェルネ師『ソルボンヌの歴史』[19]。オーソンヌ、四月一四日付。

著者デュヴェルネ師は、一七三四年に生れ、百科全書派であり、ヴォルテールの伝記をはじめ、他にいくつか小さなパンフレットを残している。絶対王政下にはこれがたたって数度にわたってバスチーユに繋がれた、情熱的な革命家であった。この著作は、王政にたいする批判とソルボンヌの独立、という観点からアンリ四世とソルボンヌの抗争をあつかったものである。

第一六番ノート。ウィリヤム・コックス『スイス旅行』[20]、四月二〇日付。

これは、スイスの政治制度、とりわけカントン（州）の成り立ちや選挙法、また相続法や公立学校の制度にもふれ、さらにはスイス各地方の特質に及んでいる、詳細な旅行記である。

第一七番ノート。その一部は、右のコックスのつづきであり、別の一部は、デュクロ『ルイ一四世とルイ一五世の統治にかんする秘められた回想』[21]にあてられている。デュクロは修史官であり、この著作は絶対王政の退廃をあばいた書である。

番号なしのノート。デュロール『君主制の開始以来今日にいたる、貴族にたいする批判的歴史』[22]。これは貴族のおかした罪の数々、自由の侵害を詳述し、さらには「人民の敵」というはげしい言葉を投げつけて、貴族制を告発している。

第一八番ノートの一部。エスターシュ・ル・ノブル『ジェルソンの精神』[23]。五月一二日付。教権至上主義（ウルトラ・モンタン）の教義にたいして、何世紀にもわたって対抗をつづけてきたフランス教会の教義が展開されている。

第一八番ノート。マキャヴェリ『フィレンツェ史』[24]、全二巻のうち第一巻のみ。ヴァランス、六月二四日付。これは『君主論』と並んで有名な、マキャヴェリの主著であり、独自の国家観にもとづいてフィレンツェの歴史を叙述したものである。

第一九番ノートは、すでにみた「表現ノート」である。

第二〇番ノート。ヴォルテール『シャルルマーニュ以来今日にいたる、諸国民の一般史および習俗と精神とについての試論』[25]、オーソンヌ、五月二二日付。中国、インドの哲学者、バビロン、拝火教から、仏、独、オランダ、デンマークの人口問題にいたるまで、まことに幅広い作品である。ナポレオンはこの抜き書きに加えて、次のような短かい批評を加えている。

「共和制か君主制か。フランスでは共和制は不可能だとの声を聴くが、君主制論者のほうが、かえってその没落に手を貸してきたのである。……二、五〇〇万人が共和国に住むことは不可能だ、というが、それは非政治的な偏見にすぎない」と、共和制擁護を強く表明している。

『知られざるナポレオン』では、この「ボルテール・ノート」につづいて「愛についての対話」が載せられている。[26] これには日付の記載はないが、この配列にしたがえば、「対話」が書かれたのは、六月二四日以降、おそらくは、七月のはじめごろであり「国富論ノート」の作成された時期と重なる可能性がたかい。このすぐあとに出てくる「ルソー・ノート」も日付が与えられていないが、ほぼ同じ時期のものと考えられる。「対話」は読書ノートではなく、彼の恋愛観を語った短かい対話形式の断章である。一例を紹介しておく。

「問い――伺いますが、あなた！恋愛とはどんなものですか？あなただって、まさかほかの人々と変りはないでしょう？　ボナパルト――恋愛は社会にとっても、個々人の幸福にとっても有害だと私は思う。結局、恋愛は益よりも害の方が多いと思う。したがって人間を守る神様みたいなものがあって、人類を恋愛から免れさせ、人類を恋愛から解放してくれるなら、それは一つの慈悲というものであろう。」

この時期最後の読書ノートがルソーの「人間不平等論ノート」である。このノートについては先にふれたが、彼のものとしてはめずらしく、かなり激しい自分の批評を残している。

「人間がその魂の精神性をたかめるのは、美徳的自由の意識（自覚）のなかにおいてである」という、ルソーからの抜き書きにたいして「自然状態についての私の省察」との題を付して、

「人間が、他の仲間との関係を有したりせず、またその欲求を感じなかったとすれば、決して、彷徨したり、孤立したりはしなかったと思う。これとは逆に、……子供から成長して大人にいたった人間は、自分の仲間を得

たいと欲し、女性との共同生活を願い、洞穴を求めて生活の中心を作り、それが雷をさけて、夜の食料貯蔵所となる」とのべ、人間は集団を成す本能をもっており、物質的な欲求が強いことを指摘し、ルソーの精神主義を批判している。当時のナポレオンが、ルソー的理想主義者から脱してボルテリアンの懐疑主義へと変った、といわれるゆえんであろう。

さて、最後に、彼がこうして周到な準備を重ねて、おそらくは一七九一年の八月中に執筆にあたったと思われる、リヨン学士院への懸賞論文は、どのようなものであったのか。これを残されている草稿から紹介しておこう。

まずその序文においてナポレオンは、「王者たちが絶対権力をほしいままにするところに、人間は存在しない」とし、それゆえに「各方面の文筆界がたえず下賤な阿諛と悪質の巧言との痛ましい光景をさらけ出」していた、と旧制度の思想界を批判する。

「しかし……圧政者たちの恫喝にもひるむことなく、バスチーユの牢獄をも恐れることのなかった幾人かの勇敢な人々から、我々は大きな恩恵を蒙っていている……強烈極まる精力と衝撃との二〇ヵ月の後に獲得せられた自由は、永久にフランス人民の栄光であろう。」

彼はフランス革命による自由の獲得を、論文の冒頭でこう祝賀したのち、幸福と何か、から説きおこす。

「人間は幸福になるために生れてきた。……それゆえ、幸福とは人間の身体組織にもっともふさわしい生を享受することに他ならない。……われわれの持っている知的感性的な組織は、動物的組織と同様に、いくつかの至上命令を有するが、……この方がはるかに重要である。幸福の本質とは、まさにこの心理的要求を全面的に発展せしめることにある。」

この「幸福」の定義を出発点にすえ、これを追求する「自然権」の存在を主張する。

「人は生れながらにして、自己の存在に重要な一定量の大地の果実を得る権利を有している。……このための完全なる思想の自由は絶対的であり、……それは自然権である。……もしこれを制約する社会秩序ありとすれば、それは災禍である。」

ここには、人間の思想の自由を「自然権」とみるルソー主義の強い影響がうかがわれる。さらに彼は次のように自由の価値を最大限に評価する。

「自由がなければエネルギーは湧かず徳は生きず、国民の力は発揮できない。……自由なしの感情、理性、さらには幸福、はない。」

懸賞論文に応募したのは一六名にのぼった。ナポレオンは最後から二番目、締切日ぎりぎりに提出している。そして審査の結果は、見事落選であった。彼の論文にたいする批評は「第一五番目の論文は、委員の注目を集めえなかった。この作者はおそらく感性の鋭い人物であろう。が、感覚に抑制がきかず、ちぐはぐにすぎ、脈絡がない。乱雑に書きちらしている[27]」とさんざんなものであった。たしかに選者の批評には一理あった。ここでは紹介を省いたが、その後の論旨の展開には論理性を欠き、文体は長々しい会話体であったり、詩のような呼びかけを繰返し用いたり、あるいは牧歌的、叙情的な表現に酔いしれたり、といったふうで、学士院に応募する論文としては、いささか場違いに過ぎたといわざるをえない。

しかし、彼ばかりに責任を負わせては酷であろう。というのは、リヨン学士院の構成委員は、いずれも地方的な名士にすぎず、全体に保守主義者が多く革命の動きには冷淡であったことが、革命による自由を情熱的に謳いあげたナポレオンの論文が、陽の目をみなかった理由の一端であったと察せられるからである。

彼が四月から七月にかけて、意識的にこの論文のために準備してきた読書の成果は、あまり生かされていたとは

思われない。『国富論』の痕跡を捜し出すことは困難である。論文執筆という行為も、ナポレオンには、あらかじめ充分な論理的展開を考え、これまでの獲得した知識の成果をそれにあわせて適度に散りばめていく、といった正統的な方法はとれず、いきなり溜っていた思考や感情を一気呵成に表出するより他はなかったのであろう。

この論文提出後、ナポレオンは再びコルシカの政情に心を奪われた。そしておそらくは、兄ジョセフを九月末におこなわれる国民議会の選挙に立候補させるのに間に合うよう、ヴァランスを出発してコルシカに向い、彼の短いが充実したオーソンヌ・ヴァランス時代は終ったのである。

ナポレオンが『国富論』を読んだ時期とは、以上のように、彼が革命とコルシカ独立に胸をたぎらせ、そのための大金を手に入れることを夢見て懸賞論文の執筆準備に精を出していた時期であったのである。さてつぎに、ナポレオンが『国富論』をどう読んでいたかをみていこう。

『国富論』ノート

「国富論ノート」は、大型二折の用紙で一三頁、正確には一二頁半にわたる自筆覚書である。右上には「ノート」(Cayer=Cahier)と記され、左上には、「雑録」(Notes divers)という記載の下に、書名が書かれ、「諸国民の富、スミス、ルシェール訳、第一巻、ヴァランス、一七九一年七月」と読める。すでにみたようにこのルシェール版は訳本四巻、コンドルセの註解一巻(当時はまだ註解が刊行されていなかったことは先にふれた)で、全五巻であったが、ナポレオンが読んだのは、この第一巻、すなわち「労働生産力」をあつかった第一篇にかぎられている。

「ノート」は全文二九五行より成るが、章別区分をしめすものは一切与えられておらず、そのまま書き下してある。このため記載された内容から判断して、第一篇の全一〇章ごとに全文を割り振ってみると、第一章一六行、第

二章なし、第三章九行、第四章なし、第五章七五行、第六章一四行、第七章一一行、第八章六八行、第九章なし、そして最後に第一〇章第一節八八行、第二節一三行となっていることがわかる。これをみると、第一〇章「労働および資財のさまざまな用途における貨銀および利潤について」の第一節「職業の不平等」が八八行でもっとも長く、ついで実質価格と名目価格をあつかった第五章の七五行、労賃をあつかった第八章の六八行、などが比較的多くの行数を含んでいる章であるといえる。ナポレオンによって完全に無視されたものは、第二章の「分業をひきおこす原理について」と第四章の「貨幣の起源および使用について」の二章である。このように、章別の単純な行数比較からすると、彼の関心がいかなるところにあったか、がある程度推測できる。つまり、理論的展開の比重がたかい章よりは、どちらかというと、歴史的な事例が紹介されていたり、政策的な提言に関説している章に、彼の関心が多く向いていたように思われる。後にみるように、イギリスやアメリカの事例に注目して、とくにフランスの国際的地位を比較しようとする意図がうかがえるのである。

他に、この「ノート」を読んで得られる一般的な印象としては、まずなによりも、ナポレオン自身の批評なり感想なりを綴った文章がきわめて少ないことである。ごく厳密にいうと、二ヵ所四行にすぎない。その第一の例は、別掲の写真版にもみられるように、第一章の分業をあつかった箇所でピン生産をとりあげて、分業によるピンの生産性がいかにたかいかを要約したあとで「このことは信じがたいように思われる」（ノート原文、第八行）、という素朴な驚きを記した一行である。第二例は「ノート」の末尾にある「労働者と耕作者は、職人の普通の階級より、知性において優れている」という三行の文章で、彼のやや結論的な感想を書き留めているとみてよい。

すでに前節でふれたように、ナポレオンの読書の「くせ」は、もっぱら知識の獲得に重きをおくもので、「読む」という行為のなかで、自己と著者とのあいだの思考の交流を積極的に展開していく型のものではなかったといえる。

また第一巻で止めてしまい、それから先の巻を読みつづけることを放棄してしまったことからも推察されるように、『国富論』そのものにたいする彼の興味も、さほど刺激されなかったのであろう。これは、たんなる経済理論の理解にかかわるだけではなく、後にもふれるナポレオンの経済自由主義にたいする評価をも示唆するものとして、注目しておいてよい。

つぎに、数字にたいするナポレオンの関心の高さに驚ろかされるが、それは異常ともいえるほど強かったように思われる。何らかの形で数字を含んでいる文章は「ノート」全体のほぼ半分にまでのぼっているのである。その例として、先にふれた冒頭のピンの分業の箇所を、やや長くなることを厭わず、第一行目から訳出してみよう。

「一本のピンは、一八の異った手順を経る。しかしこの一八の工程は、しばしば一〇名の人間によっておこなわれる……これら一〇名のものの共同作業は、一日一二ポンド〔のピン〕となる。ところで一ポンド〔のピン〕は四、〇〇〇本を含む。四万八、〇〇〇本のピンが、したがって一〇名の労働生産物であった。これは一人あたり四、〇〇〇本にあたる」（第一～八行）と分業によるピン生産の生産性の高まりを、克明に数字を写して要約している。そしてこのすぐあとに、先にみた「このことは信じがたいように思われる」という感想が記されたあと、「くぎ作りを業とする一人の鍛冶屋は一日二、三〇〇本を作る」（第九～一一行）とつづくのである。

また、のちにいくつかの例でしめされるように、彼の経済学理解の不充分さも目につく。が、彼自身の若さと経歴とを別にしても、当時のフランスにおける古典派経済学理解の一般的水準の低さを無視してこれを論じては、いささか彼には酷であろう。

以上のような一般的な印象を前提に、各章ごとの記述を簡単に追いながら、ナポレオンが『国富論』をいかに読んだか、をさぐってみることにする。

さて第一章の分業論では、まずピン作りの実例をとりあげ、その生産性の高さに素朴な驚きを表明していることはすでにみた。つづいて、火力機関の自動弁の工夫が、ここに動く一人の少年の遊びたい願望から可能になった事例を記して終っている。

ここから感じられることは、彼が生産性の増大という、いわばある事象の結果にのみ目をうばわれ、それを可能にした過程の理論的な解明への関心が乏しかったことである。「工場内分業」にはふれられてはいるものの、たんなる皮相的な記述にとどまり、それとならんでスミスが問題とした「社会的分業」については一切とりあげてはいない。そして、火力機関の自動弁の事例から察せられるように、その展開過程を安易に欲望説的に理解して事足れりとする方向にかたむいていた、といえないこともない。先節でみたように、この頃のナポレオンは、ヴォルテールに影響されて、かなり感覚主義的な傾向が強かったことが想起されてよいのである。

つづく「分業の原理」をあつかっている第二章は、一般に『国富論』の基本原理をしめしている箇所とされるが、ナポレオンの興味をひくことはなかった。また市場の問題をあつかう、これにつづく第三章も、馬車と水運との効率の比較の事例を記しているのみ（第一七～二六行）であり、さらに第四章の貨幣の起源には一切言及されていない。彼の「理論嫌い」がうかがわれるといえる。

第五章の「諸商品の実質価格および名目価格」の章は、七五行にのぼり、この章については、かなり関心がたかかったことをしめしている。このうち過半の行は、主としてローマ人の銅貨の使用、ヨーロッパでの銀の使用、イングランドの支払法貨、大ブリテンの通貨の交換比率などの歴史的事象を写したものであり、ナポレオンの知識獲得には大いに資したはずである。また、同時に彼の数字嗜好も充分満たされているが、その一例を大ブリテンの銅貨、銀貨、金貨の交換比率の事例を記した箇所から紹介しておこう（岩波版訳書、一七四～一七五頁に該当）[28]。

「四四ギニ半は正貨一ポンドの金に等しい。二一シリングは一ギニに等しい。そして二〇シリングは一ポンドに等しい。四六ポンド一四シリング六ペンスは、したがって三ポンド一七シリング一〇・五ペンスの銀に等しい」(第八三〜八八行)と、まさに数字の羅列である。

いったい、このような煩瑣な貨幣の換算率をあえて書き留める意図はどこにあったか。この箇所でスミスがねらったことは、金貨の改鋳によって銀貨の価値が引きあげられたことを説明するために、その例証を与えることにあったにすぎない。このイングランドにおける換算比率の数字そのものが、さほど重要ないみを持つとは思われない。まして、「フランス人」にとってをや。しかもナポレオンは、この数字を用いて説明さるべき、かんじんの事象については書き留めようとはしないのである。これに先立つ記述文は、

「イギリスが金を法貨として受け入れたのは、長い時間を経てからである。金と銀との比率を定めた、いかなる法律も存在していなかった。これを定めたものは市場である……やがて、この割合を定めた方が便利だということに気づいた」(第七一〜七八行、訳註、一六九〜一七〇頁に該当)。

と法定交換率の規定の歩みを、明晰なかたちで要約している。そして、この例証として銅と銀との比率の例をあげる。ここまでは記述文と例証の数字とのあいだには、ある程度関連があるといえる。ところが、先の交換比率の数字を、これにすぐつづけてしまうのである。これでは、金貨の改鋳による銀貨の変動、というスミスの説明したい論理の発展が、まったく無視されることになる。ここからあきらかなように、ナポレオンは比較的常識的に理解しやすい論理はうけいれ、その要約も明晰であるものの、それがいったん複雑化すると論理の筋道を追うのを放棄し、数字嗜好によって安易につなげてしまう……ときめつけては、厳しすぎるであろうか。

ところでわれわれの興味をひくのは、むしろ理論的な記述文のほうである。周知のように、この章の冒頭でスミ

スは不充分ながら、労働価値説を説明し、そこから商品は名目価格と実質価格との二つの価格を持ち、前者が貨幣であらわされ、後者は労働であらわされる、と説いている。さらに、この表現を敷延して、商品を労働に、労働を生活必需品および便益品におきかえて、「労働は諸商品と同じように実質価格と名目価格をもっている。……その実質価格はそれと交換に与えられる生活必需品および便益品の量に存し、その名目価格は貨幣の量に存する……」（訳書、一五七頁）とのべている。が、この箇所をナポレオンは、「貨幣は実質価格と名目価格とをもつ。後者は貨幣の量をあらわし、前者はそれと交換に与えられる生活必需品および便益品をあらわす」（第二七～三一行）と記し、先の原文の主語である「労働」を、「貨幣」に置換えて理解しているのである。その限りでは、必しも間違とはいえないが、これではスミスの価値論の論理的発展が無視されることになり、価格をたえず貨幣に結びつけてしまう俗流的解釈に流れたものといってよい。

このことは、すぐ次につづく地代論の要約において確認される。スミスは、永代地代の変動の箇所で、地代が貨幣で支払われるものとすれば、第一に貨幣の含む金・銀の量が時代によって変動すること。第二には、それがたとえ変動しなくとも、その価値が時代とともに変化する、とのべている（訳書、一五七～一五八頁）。ナポレオンは、これを独自の文章で解釈しなおす。第一のばあいは「同一量の金あるいは銀にたいしてあたえられる価値が時により異なるとき」（第三五～三七行）である。その際には、「二〇〇年後に地代の実質価格が同一にとどまるとき、等価の金量に等しい〔銀貨〕一〇〇エキュが、同一の収益量を有す同一の労働量をあらわすことはないであろう。」（第三七～四一行）。第二に、「もし地代が名目価値でしかあらわされないとすれば、そこには必然的に大きな切下げがあろう。なぜなら生産物は、貨幣制度〔交換比率をさす〕にしたがって、変化しつづけたのであるから」（第四二～四六行）。

以上のように、ナポレオンは地代の変動要因として二つの理由をあげている。一つは、地代が貨幣の実質価格と

同一であるばあいには、その実質価格に対応する同一の収益量をもった労働量が変化しうる、とする。二つには、もし名目価格が等しいばあいには、貨幣の交換比率が異なるため、それによってあらわされる生産物の量が変化する、とするのである。

名目価格の減価に二種類あるとするスミスの説明にたいして、ナポレオンはこのように、地代の減価には、実質価格と名目価格のそれの二種類があると解釈するのである。当然ながら「実質価格」の理解は誤っており、スミスの挙げた第二の例を二つにわけて説いているため、かえってこれをわかりにくくしているにすぎない。この主たる理由は、先にもみたように、生産物一般の価値と価格の問題、実質価格と名目価格の問題を、俗流的に貨幣をとおしてのみ理解していたことにあったといえるであろう。

つぎに第六章の「価格構成」では、彼はつぎの文章を書きとめている。

「土地の生産物は、三分割される。(1) 耕作に用いられた動物および人間の食物。(2) これに用いられた資財の利子。(3) 地主への地代。小麦価格はこれらの三要素をもとに計算される。労働価格と資財の利潤しか支払われない商品がある。たとえば、海魚。労働価格だけしか支払われないものは、たとえば、スコットランドの小石採取人である」(第一〇二～一一五行)。

次章以下においても同様であるが、スミスがあらかじめ数字を付して箇条書で要約的にのべているところは、ナポレオンもこれを正確に書き写している。が、それもやや機械的なとらえ方といってよく、ここでのスミスの労働生産物についての議論には、まったく興味をしめしてはいない。

第七章の「自然価格論」においては、はじめに、「自然価格とは先の三要素に対応した価格である」との三行(第一一六～一一八行)があって、次のような市場価格の要約がある。

「市場価格とは、買い手と周囲の諸条件とのあいだの競争によって決定される、日々の価格である。この市場価格は、自然価格のまわりを重力によって回る（graviter）。独占、ある種の秘密の相続……ギルドと親方……等々は、この市場価格にもっともおどろくべき影響を及ぼす」（一一九～一二六行）。

この要約は適確である。後との関連をも含めて、ここで注目しておいてよいのは、市場価格を成立せしめる自由競争の阻害要因を、独占、相続、ギルドと挙げて、この独占の問題への少なからぬ関心をしめしていることである。

つぎに第八章の「労賃」に移るが、これには全文六八行にのぼる、かなり多くの行数がさかれている。まず冒頭で「アメリカにおいては、労働価格はイギリスよりずっと高い」（第一二七～一二八行）と記し、その理由として（1）賃銀がたかい。（2）しかも食料品がより安価であるために、賃銀の実質価格はなお高くなる、の二つを挙げている。そしてその結果として人口の増加率がたかいことに注目している。さらにこれとは対照的な例として、人口の停滞的な中国をとりあげるのである。

つぎに、イギリス一国内でも、ロンドン、エジンバラの例をひいて、場所の違いによって賃銀も異なることを記す。スコットランドの養育率に注目しつつ、「労働価格は労働者にたいする需要によって規定されるのであり、商品価格によるのではない」（第一七六～一七九行）との評言を残している。この文章に相等する『国富論』の原文箇所は、「ノート」の文章の前後の位置から考えて訳書、二五一頁の末から二五二頁の前半にかけてである。ここでスミスは、労働需要の増大により、その報酬があがると人口は増加する、という論理をのべており、商品価格の要素は考えに入れていなかった。賃銀と労働需要との関係を説こうとする箇所に、ナポレオンが商品価格の要素を入れた点には、やや彼独自の解釈が加わっているというべきであろうが、その理由についての説明はない。そして、「ボストン、ニューヨーク、フィラデルフィアの例がそれを証明する」（第一八七～一八八行。訳書、二五四頁）。以上

のように経済発展の国際比較にたいするナポレオンの関心は、かなり強いものであったことがわかる。とくにアメリカへの興味がうかがえるといえる。

この章の最後は、「生産労働は、食料の欠乏期よりも豊富な時期に、かなり高くなる」（第一八九～一九一行。訳書二五八頁）という要約ののち、ナポレオンはつぎのような批評を下して結んでいる。

「繁栄の状態のときに、労働者は幸福である。彼らは、凋落か繁栄かの、異った漸次的な変化を被っているのである」（第一九二～一九四行）。

つづく「資財の利潤」をあつかう第九章は、すでにみたように彼によって完全に無視されているため、最後の第一〇章にうつる。これは「労働および資財のさまざまな用途における賃銀および利潤について」と題されるもので、原著でももっとも長い部分ではあるが、理論的な意識は少ない章である。つまり、前二章での賃銀と利潤の自然率について論じたあとこれをうけて、職業の相違によって、この自然率に差異が生じる事情を、具体的な事例をとおして考察しようとする箇所である。このように、ナポレオンにとっては、労賃は理解しやすかったし関心もあったため、第八章につづいて、ただちに第一〇章の具体例をかなり丹念に追っていくものの、第九章の利潤といういわばやや抽象度のたかい概念には関心をしめさなかった、といえるであろう。

まず第一節の「職業そのものの性質から生じる不平等」は、「ある職業における小額の利得をうめあわせる、五つの主要な事情がある」と書いて、ただちに「（1）職業そのものの快、不快。（2）徒弟修業の難易。その費用の高低にしたがう。（3）仕事の継続か中断か。（4）職業にたずさわる個人へ与えらるべき信任の限度と広がり。（5）成功への可能なる期待度の大小。」（第一九八～二〇四行。訳書、二九二頁）とその五つの条件を、ほぼ仏訳文どおりに書き写す。そして、以下にこの五つの「事情」をそれぞれ簡単に要約していく（第二〇五～二四五行。訳書、二

九二〜三二五頁)。

ここでは、毛織工、屠殺業者、宿屋、弁護士、医者、職人、石工、時計屋、宝石商、靴屋、役者、保険会社などのさまざまな職業の特質が、いきいきと具体的にとりあげられている。われわれの興味をひくことは、すでにみたように彼の「くせ」として、論理展開が複雑になり自分の興味にふれないときには、数字嗜好に逃げて、むやみに細かい数字の羅列を写してこと足れりとする傾向があった。が、ここではそれは必要なかったのである。数字の出てくる箇所は、「九九〔戸〕に一つも火災保険はかけられていない」(第二四三行)という一行のみで、しかも簡潔に表現されており、「全国の平均をとってみると、二〇〇戸のなかの一九戸、否おそらくは一〇〇戸のなかの九九戸は火災保険をつけられていない」(訳書、三二〇頁)という原文の表現に比較するとその違いがわかる。これにすぐつづく文章は、彼の「数字離れ」をもっとはっきりしめしているといえる。つまりナポレオンは、「ロンドンの労働者の価格はエジンバラの二倍である」(第二四四〜二四五行)と記すのみであるが、原文ではそれにつづいて、「平和な時代の商船の勤務は、一暦月につきロンドン相場で一ギニないし約二七シリングである。ロンドンのふつうの労働者は、一週九ないし、一〇シリングの割合で計算すると一暦月に四〇ないし四五シリングを稼得しうるわけである」と彼のとびつきそうな数字がふんだんに出て来ていたのである。冒頭に数字を付した結論がすでに与えられており、これを具体的な事例にそくして敷延していく、というこの章での論述のスタイルは、とくに明晰を尊ぶエスプリ・カルテジアン(デカルト的精神)になじんだ青年の頭脳には、快よく滲透していったのであろう。それに較べて、いかにもアングロ・サクソンに特徴的な経験主義的な思考、しかも専門の経済学者の手にもあまる、スミス特有な錯雑した論理と多様な表現とにあふれている他の多くの箇所を理解することは、ナポレオンにとっては、はなはだ苦行であったことが、ここからも推察されるのである。

この箇所の結論は以下のようにきわめて正確かつ簡潔にまとめられている。

「労働賃銀に差異を生ずるこれら五つの事情のうちで、資財の利潤に影響をおよぼすものは、したがって二つだけである。すなわち、(1) 職業の快、不快。(2) それにともなう危険か安全か。資財の利潤に影響するのは主として後者である。さまざまな資財の利潤は、労働賃銀よりも、変動が少ない。」(第二四六〜二五三行。訳書、三一六頁)。

これにつづいて、一般に利潤と賃銀とが混同されていると指摘し、この例を薬屋にとる。そして投機者の例にうつり、これも簡潔かつ的確につぎのようにまとめている。「投機者の利得は計算しえない。彼が成功するか失敗するかは時の運であるから。この男には定った商売はない。たえず変っている」(第二六八〜二七一行。訳書、三二〇〜三二一頁)。

ナポレオンが、第九章では避けてとおっていた「利潤」についても、これにつづく箇所では、こう記している。

「資財の利潤は、それが使用されて生産される商品の価格にしたがって動く。一般に、年間で同一量の職業(industrie)が、同一の資財利潤を生み出す、ということは正しい」(第二七二〜二七四行。訳書、三二四頁)。

ここでの原文は、同一量の「商品」を生みだす、といっているのである。このように、またすでにいくつかの箇所でもみとめられたように、ナポレオンの要約には、しばしば一つ先の論理を見越して、原文とは別の表現を用いて記している例が少なくない。彼の頭の回転の早さからくるのであろう。ところが、経済学の論理展開に充分なじんではいなかった彼にとっては、その論理の飛躍がかならずしも正鵠を射ていないことにならざるをえなかったことはすでにみた。が、ここでの飛躍はまず問題なかろう。ついで「しかし公喪の年は黒布の価格をひきあげる」(第二七八〜二七九行。訳書、三二五頁)、を記したのち、「農業においては、同一量の耕作への〔労働〕消費をしても、収

穫量には大きな差異が生じる」（第二八〇～二八二行。訳書、三三五頁）と、農業の特質に注目して、この第一節を終っている。

さて最後の部分である第二節「ヨーロッパの政策によってひきおこされる不平等」に相当する箇所に移ろう。

その冒頭で、「ヨーロッパの政策は、時間（le temps）と資財の用途価格において大きな不平等を生み出している」（第二八三～二八五行。訳書、三三〇頁）と記す。ここでの「時間」は、原文の文意からして、おそらく「労働」に該当するものと思われる。これも、たんなる不注意による誤ち、というより彼の解釈の論理的飛躍とみるべきなのであろうが、そのいみするところはかならずしも明瞭ではないが、労働が時間の消費であると考えれば、理解できないことでもない。

これにつづいて「この不平等を生み出ものは三つの方法による」として、原文の、三つの方法をのべているそれぞれの箇所の冒頭部分を要約してつぎのように記す。

「（1）ある同業組合における競争者の数を抑制することによって（訳書、三三一頁）、（2）他の職業においては、その自然な限度以上に競争者の数を増大させることによって（訳書、三五三頁）、（3）労働と資財の自由な流通をさまたげることによって（訳書、三六三頁）」（第二八六～二九二行）。

この要約は、やや機械的にそれぞれの該当箇所の冒頭部分を要約したものにすぎないといえる。ただ（1）の「同業組合」（corporation）は、原文の表現では「職業」（profession）である。この節では、スミスが同業組合の問題を扱っているのであるから、ナポレオンの要約が的確であるとはいえる。が、その他の箇所については、原文の内容を充分追っていたか否かは疑問なしとしない。むしろここでは、原文を追わずに各項目の最初の要約を、機械的に引き写したような気配が強いのである。

さて、「ノート」の最後の三行は、すでにこの項のはじめに指摘しておいたように、ナポレオンの数少ない独自な批評である。再現すると「労働者と耕作者は、職人の普通の階級よりは、知性において優れている」（第二九三～二九五行）というものである。

この文章をどう読むか。富の唯一の源泉を農業に求め、農業者の労働のみが生産的であるとみなし、職人や商人の労働を評価しようとしなかった、当時支配的であったフィジオクラットの影響をうかがえるもの、と考えることもできるであろう。が、おそらくは、すぐ直前の同業組合による自由競争の抑制に対応しているのではなかろうか。すなわち、職人はみずからの利益の擁護のみにかかわって、それを実現するために同業組合による競争規制をしている。そしてこれによって全体としての富の増大が制約されている。これに較べれば、労働者、農民のほうがよほど知的にすぐれている、という含意ではなかろうか。すでにみたように、第七章においても、ナポレオンは、自由競争を阻害する要因に注目して、独占や職業上の秘密の相続にくわえて、同業組合と親方制とを指摘していた。「ノート」の最後が、こうして自由競争を阻害する同業組合に拠る職人を批判し、農民、労働者の知的優越性を主張していることは、後年の、同業組合の禁止や分割地農民の法的追認をおこなったナポレオンの姿勢を、明瞭に示唆していると考えることも許されるであろう。

*　　*　　*

ナポレオンの皇帝在位中の発言を後年ボナパルティストが項名別に編纂した『ナポレオン辞典』[29]の「アダム・スミス」の項をみると「皇帝はアダム・スミスが『国富論』でおこなった、経済学上の多くの問題を検討した。皇帝は、それを原理としては認めるものの、その適用においては、誤っていると考えた」とある。また「経済学」(économie politique) の項は、ナポレオンの言葉としてつぎのように書かれている。

「経済学者は、イギリスの繁栄をたえずわれわれに吹聴している。そしてそれを一つの手本としてわれわれに示すことには選ぶところがない。が、その当のイギリスこそ、実は関税制度はもっとも重く、もっとも絶対的なのである。経済学者ときたら、関税撤廃を望み、輸入禁止の廃止を求めるばかりである。が、イギリスこそ、それをつづけているのだ。」

ナポレオンが皇帝にあった時代は、イギリスにおいては産業革命が進展しつつあり、その圧倒的に高い生産力を背景とした、安く優秀なイギリス商品が大陸をめざして滔々と流れこんでくる時代であった。すでにフランス革命において、一七九一年の一般関税法以来、こうしたイギリス商品の競争から国内市場を確保するための保護関税を設定して、明確な保護主義の立場が打ち出されていた。やがて、イギリス商品の販売・所有の禁止にまでつきすすみ、全面的な海上戦争にまで発展したことは周知のとおりである。

ナポレオンは、こうした革命期の保護主義を徹底させ、いわゆる大陸制度 (système continental) を完成させた。[30]右にみた、ナポレオンのスミス観は、自由主義を望み、イギリスの先進性を称えた若き日のそれとは大きく変化し、イギリス古典派経済学を祖述する経済学者にたいする激しい非難へとつらなっていった。そして徹底的な保護主義を必然化せざるをえなかった相対的後進国フランスの、先進国イギリス的自由主義のイデオロギーにたいする明確な反発をしめしていると考えられるのである。

旧体制下における『国富論』への期待は、すでに明らかにされたように、絶対王政からの脱却の途を捜した啓蒙的知識人による、イギリスからの政策的指針の獲得へのそれであった。すなわち、政策的には、絶対王政の財政基盤確保のためにはかられた、ギルド制の強化に基礎をおいた産業の規制体系から、経済的自由主義への移行を求める期待にあり、それをつうじて国内産業の展開をうながすことを目ざしたものであったといえる。それゆえ、彼らの精神的態度は基本的には先進国イギリスへの同化であったといわざるをえない。しかし、自らの力で革命をなしとげ、旧体制を否定して新しい体制を生み出した、「第三身分」によるジャコバン主義の深化は、国内における旧体制の否定という枠内では開明派の自由主義と共同しえたが、もはやたんなる先進国の政策的模倣・追随にとどまることを許さなかった。そしてとくに国際市場における対抗関係を意識して、彼らが革命の渦中で積極的に打ち出した自国産業の保護育成の途は、結局は先進国イギリスへの同化をはかることではなく、むしろ全くの異化、全面的な対立へと向かうことに行きつかざるをえなかった。そして「革命の子」ナポレオンが、これを「大陸制度」として完成させることになったのである。

『国富論』のフランスへの紹介者たちが、総じて革命に受け入れられるところとならず、不遇に終ることになった理由も、実はこの、歴史の進展とともに先進国イギリスへの同化と異化とをめぐる知的態度の深刻な亀裂が拡大したことにあったといわねばならない。

こうした原蓄期の経済発展の相対的なたち遅れと、それから必然化された保護主義的な政策の積極的な採用による資本蓄積の加　速化の要請、というフランス資本主義の特殊性は、その後のフランスにおける古典派経済学の受容とフランス経済学の形成にも微妙な陰を落とすことになる。[31] たとえばJ・B・セーとともスミス経済学の祖述から出発したシスモンディは、やがて一八一九年に著された『経済学新原理』[32]のなかで古典派批判を明確にした。そ

れは、当時ヨーロッパに発生した周期的恐慌と、それによる労働者の窮乏化を目撃して、これを説明する新たな理論構築を迫られたためであった。そしてこの社会的混乱を終局的に救済するためには、つまり「富の分割を調整し、公平をはかるためには、アダム・スミスが排撃した政府の介入をたえず要請するのである」と古典派的経済自由主義からの決別を明確に宣言せざるをえなかったのである。

ナポレオンと『国富論』との関係は、右のようにみてくると、先進国イギリスにたいして当時のフランスの置かれていた困難な立場を、象徴的にしめしているものといってよいであろう。そして絶対王政の迫害に抗して古典派経済学の移入をはかった、開明的なフランスへの『国富論』紹介者たちは、革命の成就を慶ぶ間もなく、こんどは革命独裁により追い越され、歴史の舞台から消えていったのである。

〈註〉

(1) Frédéric Masson et Guido Biagi, *Napoléon inconu*, 2 vols, 1895. なお、本書については煩瑣をさけるため、原則として出典は明示しない。日付をたどれば容易に典拠を求めうるからである。

(2) ナポレオンが『国富論』を読んだ事実は知られている。これはのちにみるように、ナポレオン自身が、後年『国富論』を読んだことを明言しているからである。また、セント・ヘレナに幽閉されていた折には、のちにみるガルニエ版が彼の蔵書に含まれていた事実が、パリの国立図書館の蔵書目録の記載からあきらかにされている（Bibliothèque Nationale, *Catalogue*, T. 145, p. 580)。

また次のような指摘もある。「ナポレオンは、パリの兵学校在学中、フィランジェリとネッケルと同様に『国富論』も読んだ」（August Fournier, *Napoléon, the First*, translated by Bourne, 1904, p. 13., *cit. par.* Melchior Palyi, The introduction of Adam Smith on the continent, in *Adam Smith*: 1776〜1926, 1928, p. 181.）しかし、この事実は確認されえない。また「ノート」の存在については一切ふれられていないのである。

(3) この「国富論ノート」は、一九世紀の手稿蒐集家として世界的に高名であった、トマス・フイリップス卿 (Sir Thomas Philips) の所蔵するところであった。第二次大戦後、フイリップス・コレクションは英米で一〇数回にわたる入札の後散逸し、「ノート」はアメリカのナポレオン研究家の手にわたったが、最近雄松堂を経てわが国にもたらされ、千葉県君津市、鹿野山神野寺が入手したものである。

筆者に「ノート」の存在を教示され、『国富論』特集の機会にこの紹介をおこなうよう勧めて下さったのは時永淑教授である。時永教授、ならびに所蔵者の鹿野山神野寺、複写の提供および解読の基礎に援助をいただいた、雄松堂編集室和田重男氏に、記して感謝したい。

(4) 『国富論』の仏訳については、これまで異説や混同があり、充分確定していたとはいいがたい。筆者の調べた限りでは、以下にみるようにこの四種といえる。他に、フランスにおいてスミスと親交の深かったモルレ師 (Abbé Morellet) が訳業にとりかかったが、ブラヴェ版が出たので出版をとり止めたとされる (J. Rae, *Life of Adam Smith*, 1825, p. 359, 大内兵衛、節子訳『アダム・スミス伝』三六六頁)。

煩瑣をさけるために、仏訳本のリストをあらかじめ、年代順に列挙しておくことにする。なお標題の仏訳は、独訳のばあいと異なり、訳者を問わずすべて同一の訳文となっている。Adam Smith, *Recherches sur la Nature et les Causes de la Richesse des Nations*, traduit par M**, 1778~1779 (i); Ibid., par [Jean Louis Blavet], 1781 (ii); Ibid., par Jean Antoine Roucher, 1790 (iii); Ibid., par German Garnier, 1802 (iv).

(5) J.L. Blavet, *Un Essai sur l'Agriculture Moderne*, 1775.

(6) Adam Smith, *Théorie des Sentiments Moraux*, traduit par J. L. Blavet, 1775.

(7) Marquis de Condorcet, *Esquisse d'un Tableau Historique des Progrès de l'Esprit Humain.*

(8) スミスとフランスの経済学者との交流について一九世紀末に、サンシモン主義者で自由貿易論者の経済学者、ミシェル・シェヴァリエが小論を残している。Michel Chevalier, Etude sur Adam Smith et sur la fondation de la science économique, *in "Journal Economiste"*, 15-1-1874.

(9) Germar Garnier, *Abrégé Elémentaire des Principes de l'Economie Politique*, 1796.

(10) Do., *Histoire des Banques d'Escomple*, 1806.

(11) Do., *Histoire de la Monnaie depuis le Temps de la Plus Haute Antiquite jusqu'au Règne de Charlemagne*, 2 vols, 1819.

(12) この版に付されたスミスの解説は、平田清明訳「国富論序文」、山田秀雄訳「スミスとフランスの経済学者」として、高島善哉編『国富論講義』第三、五巻、一九五〇年に訳出されている。

(13) J. B. Say, *Traité d'Economie Politique*, 1803.

(14) Adam Smith, *La Richesssе des Nations*, entièrement revue, corrigée et précédée d'une notice biographique par M. Blanqui, 2 vols, 1843. この版はしばしばブランキ訳とされるが、あくまでガルニエ版の改訂のうえに各種註解を付したものとみなされるべきである。

(15) E. Ludwig, *Napoléon*, 1925, 金沢誠訳『ナポレオン伝』、一九六六年、一二頁。

(16) Christopher Herald, *L'Heure de Napoléon*, 1969, p. 38.

(17) H. B. Stendhal, *Memoir sur Napoléon* 1876 : Edition L. A. H. C, 1929, p. 55, 西川長夫訳「ナポレオンの生涯にかんする覚書」『スタンダール全集』第一一巻、一九七〇年、三七頁。

(18) Ibid, p. 48, 訳書三二頁。

(19) L'Abbé Théophile Imarighon Duvernet, *Histoire de la Sorbonne*, 1790.

(20) William Coxe, *Voyage en Suisse*, [?].

(21) Chables Pinot Duclos, *Memoires Secrets sur le Règne de Louis XIV et V*, 1790.

(22) Jacque Dulaure, *Critique de la Noblesse, depuis le Commencement de la Monarchie jusqu'aux Nos Jours*, [?]. これはおそらくは、Do., *Crimes et Forfaits de la Noblesse et du Clergé* [s.d.] のことであろう。パリ国立図書館の目録によっても確認されないからである。

(23) Eustache Le Noble, *Esprit de Gerson*, 1969.

(24) Niccolo Machiavelli, *Histoire de Florence*, traduit par M. Barrett, 1789, 2 vols.

(25) Voltaire, *Le Siècle de Louis XIV*, 1751～56 ; Do., *Essai sur l'Histoire Générale et sur les Moeurs et l'Esprit des Nations depuis Charlemagne jusqu'aux Nos Jours*, 1756.

(26) 「恋愛についての対話」と懸賞論文は全文 Tancrède Martel, *Mémoires et Oeuvres de Napoléon*, 1910, 若井林一訳『ナポレオン著作集』一九六七年、七一～八八頁に訳出されている。

(27) Frédéric Masson etc. op. cit., p. 211.

(28) ここで用いる『国富論』の邦訳としては、岩波文庫版、大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』第一分冊を使用することとする。

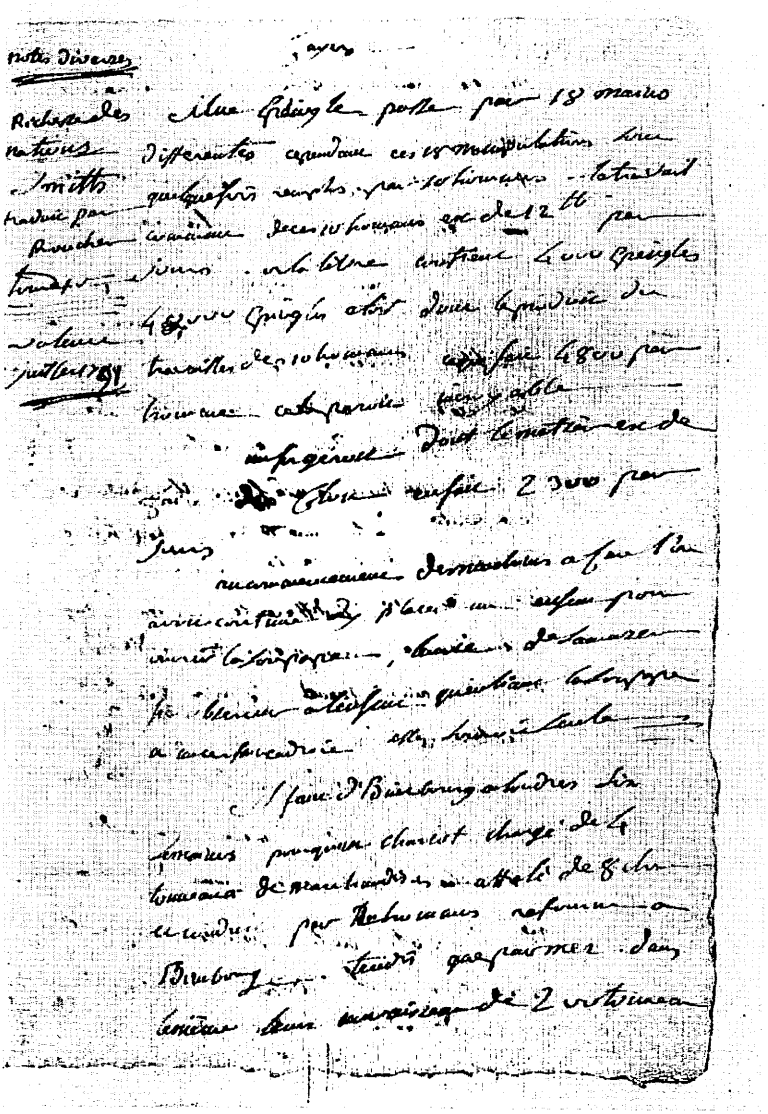
(29) *Dictionnaire-Napoléon ou recueil alphabétique des opinions et jugements de l'Empereur Napoléon Ier* [s. d.].

(30) 大陸制度については、吉田静一『フランス重商主義論』一九六二年、同、『近代フランスの社会と経済』一九七五年、第三章を参照。

(31) 一九世紀前半のフランス経済学史については、さしあたり、吉田静一「フランス経済学」(小林昇編『経済学史』昭和四二年所収)が示唆に富む。

(32) J. Ch. L. S. Sismondi, *Nouveaux principes d'economie politique, ou de la richesse dans ses rapports avec la population*, 2 vols, 1819, 菅間正朔訳『経済学新原理』二巻、一九四九～五〇年。

ナポレオン自筆の『国富論』ノート（1791年）



Note de Lecture de Napoléon Bonaparte sur *la Richesse des Nations* d'Adam Smith

Notes diverses

Richesse des Nations
SMITH
traduit par Roucher
Tome 1er
Valence, Juillet 1791

Cayers

Une épingle passe par 18 mains différentes, cependant ces 18 manipulations sont quelques fois remplies par 10 hommes...le travail commun de ces 10 hommes est de 12 livres par jour. Or la livre contient 4,000 épingles. 48,000 épingles étaient donc le produit du travail des 10 hommes. Ce qui fait 4,800 par homme : cela paraît incroyable.

Un forgeron dont le métier est de faire des clous en fait 2,300 par jour.

Au commencement des machines à feu l'on avait coutume d'y placer un enfant pour ouvrir la soupape : l'envie de s'amuser fit observer à l'enfant qu'en liant la soupape à un certain endroit elle s'ouvrait seule.

Il faut d'Edimbourg à Londres six semaines pour qu'un chariot chargé de 4 tonneaux de marchandises, attelé de 8 chevaux et conduit par 2 hommes retourne à Edimbourg. Tandis que par mer, dans

le même temps, un vaisseau de 200 tonneaux *p. 1*
monté par 7 ou 8 hommes va et revient.
Ainsi huit hommes font ce qu'il faudrait
25 50 chariots, conduits par 100 hommes
et tirés par 400 chevaux.

L'argent a un prix réel et un
prix nominal ; celui-ci exprime la
quantité d'argent et celui-là la quantité
30 des nécessités et des commodités de la
vie, qu'on donne en retour.

Un homme se fait-il la réserve
d'une rente sur une terre. 2 choses
concourront de concert à la réduction de
35 cette rente. 1° les différentes valeurs que
le temps donne à une même masse d'argent
ou d'or. Ainsi quand le prix réel de
la rente resterait le même, au bout de
200 ans, 100 écus faisant tant d'onces ne
40 représenteraient pas la même masse de
travail vu la même somme de jouissance.
2° Si la rente n'était spécifiée que par sa
valeur nominale, il y aurait nécessairement
une grande réduction, car les produits *p. 2*
45 ont continué de varier suivant le système
monétaire.

Dans la 18e année du règne
d'Elisabeth, les collèges en renouvelant leurs
baux, stipulèrent en blé le tiers de leurs
50 revenus affermés, de sorte que ce tiers devait
être payé en blé ou en argent selon le prix
du marché. L'argent que produit ce tiers est
aujourd'hui le double du produit des
2 autres tiers. Cependant, depuis Elisabeth
55 le système monétaire n'a souvent aucune
altération.

Les Romains ne connaissaient que les monnaies
de cuivre, lorsque, 5 années avant la guerre
punique, ils commencèrent à fabriquer les monnaies
60 d'argent : aussi l'as était-il la mesure de
toutes les estimations. L'as était une monnaie de
cuivre.

Les Barbares qui se découpèrent l'empire
français [romains] eurent des monnaies
65 d'argent et ne connurent que longtemps
après les monnaies d'or et de cuivre.

La monnaie d'argent était ancienne

en Angleterre lorsque sous Edouard 3
l'on vit celle d'or et ce ne fut que *p. 3*
du temps de Jacques 1er que l'on
vit de la monnaie de cuivre.
Un long temps s'est écoulé avant
que l'Angleterre aie reçu l'or en
paiement légal. Aucune loi n'avait
fixé la proportion de l'or et de
l'argent monnayé. C'était au marché
qu'elle se fixait...Ensuite on a
trouvé plus commode de fixer cette proportion.
12 sols de cuivre pesant la
moitié d'une livre, de 16 onces la
livre de cuivre vaut intrinséquement
7 sols.
44 Guinnées 1/2 valent 1 livre d'or au titre.
21 schellings valent 1 Guinée, et 20
schellings valent 1 livre sterling.
46 livres sterling, 14 schellings et 6 sols valent
donc une livre d'or au titre. 1 once d'or vaut
donc 3 livres, 17 schellings 10 s 5 deniers
l'once de 12 à la livre et au titre de la
monnaie de Londres. *p. 4*

A la monnaie d'Angleterre 1 livre d'argent
fait 62 schellings, une once, 5 schellings et 2 sols.
Il n'y a pas en Angleterre de droit régalien
sur la fabrication. 1 once d'argent au titre s'entend.
Dans le marché général d'Europe,
pour une once d'or pur on reçoit 14 onces
d'argent pur, cela monnaie de France et de
Hollande. Pour une once d'or par monnaie
d'Angleterre, on reçoit à peu près 15 onces.
Le titre de la monnaie d'or
d'Angleterre est de 11 onces sur une d'alliage.
Le produit d'une terre se partage
en 3. 1° La nourriture des animaux et hommes
employés à la culture, 2° L'intérêt des
fonds employés à cet effet, 3° La rente que
la terre doit à son propriétaire.
Le prix du blé se calcule sur ces
3 rapports.
Il est des marchandises qui ne doivent
payer que le prix du travail et le
bénéfice du fond ; le poisson de mer
par exemple ; il en est qui ne doive *p. 5*
payer que le prix du travail,

les chercheurs de cailloux d'Ecosse par
exemple.

Le prix naturel d'une marchandise
ou denrée est le prix qui correspond
aux 3 parties auxquelles il doit subvenir.
Le prix du marché est le prix journalier
fixé par la concurrence des acheteurs
et des circonstances ; le prix du marché
va gravitant autour du prix
naturel,...le monopole,...la succession
de quelque secret,...les jurandes et maîtrises
etc...ont l'influence la plus marquée sur
le prix du marché.

En Amérique le prix du travail
est beaucoup plus fort qu'en Angleterre,
1° parce que le prix pécuniaire est
supérieur étant de 2 schellings
sterling pour les plus bas prix. De
6 schellings pour le charpentier, etc. etc.,
2° parce que le prix réel est plus *p. 6*
fort en Amérique, vu que les comestibles
sont à meilleur marché.

Il faut 500 ans dans les états
de l'Europe pour doubler le nombre
d'hommes. En Amérique l'on trouve que ce
nombre doubé en 20 ans.

Si un journalier de la Chine
peut trouver dans un travail opiniâtre
de quoi acheter un peu de riz il est
content.

L'on détruit un grand nombre d'enfants
en Chine en les noyant dans des canaux.
Il est même, dit-on, une classe d'hommes
avouée qui gagne sa vie à ce métier.

18 sols par jour, paraît être le prix
du travail à Londres ; à quelques milles
de distance ce prix descend à 15 sols,
10 sols à Edimbourg, à 8 sols à quelque
distance. Cependant le grain est plus cher
en Ecosse qu'en Angleterre.

La paie d'un fantassin a été réglée à
8 sous en 1614.

Le Lord Hales a calculé sous Charles 2
qu'une famille composée de 6 personnes, du
père, de la mère, deux enfants en état de faire *p.*
quelque chose et deux autres hors d'état de

160 s'occuper, dépense nécessairement 10
schellings par jour [semaine] ou 26 livres sterling
par an.

Il n'est pas rare dans les montagnes
d'Ecosse de voir des femmes qui, mères
165 de 20 enfants, n'en conservent pas 2
vivants.

En quelques endroits la moitié des
enfants n'atteint pas l'âge de 13 ans
la quatrième en beaucoup d'autres
170 elle n'atteint pas la 7° presque
dans aucun pays elle n'atteint la
9e, ou la 10e.

C'est le besoin de main d'œuvre
qui règle le prix du travail et
175 non pas le prix de la denrée.

Le prix du travail augmente
ou diminue la population parce qu'il
multiplie ou diminue le nombre
des mariages annuels. C'est pour
180 cela qu'en Amérique la population *p. 8*
croit, qu'elle marche lentement dans certains
états d'Europe et qu'elle est stationnaire
en Chine.

L'ouvrage fait par des hommes
185 libres doit enfin coûter moins que
l'ouvrage fait par des esclaves.
L'exemple de Boston, de New York et
ce de la Philadelphie le prouve.

Le travail des manufactures est plus
190 considérable dans les temps d'abondance que dans
des années de disette.

Lorsque l'état prospère les ouvriers
sont heureux ; ils suivent constamment des différentes
gradations, de décadence ou de prospérité.

195 Il y a 5 circonstances principales
qui, dans quelques professions, tiennent lieu
d'un petit gain.

1° L'agrément ou le désagrément de
l'emploi même. 2° La facilité ou la difficulté de
200 l'apprentissage, selon qu'il est cher ou à bon marché.
3° La continuité ou l'interruption du travail.
4° Les bornes ou l'étendue de la confiance qu'il faut
accorder aux individus que l'on emploie. 5° dans
le plus ou moins d'espérance probable du succès. *p. 9*
205 En conséquence : De la 1ere observation que le salaire

d'un garçon tailleur est moindre que celui d'un tisserand et que le salaire d'un charbonnier est le plus fort, le boucher est un emploi bien lucratif parce qu'il est bien déshonorant.

Il en est de même pour le bénéfice du fond. Le fond qu'emploie un aubergiste, lui rend beaucoup parce que cet emploi est très fatigant.

2° En appui de la seconde observation c'est l'expérience, un artisan est mieux payé qu'un laboureur et l'avocat et le médecin mieux que les artisans.

Le bénéfice du fond ne paraît pas suivre cette variation, toutes les branches de commerce paraissent également difficiles à cultiver.

3° Un maçon ou porteur de briques doit être mieux payé puisqu'il est une partie de l'année sans pouvoir rien faire.

Cette troisième cause des prix du travail ne peut avoir d'effet sur le fond qui dépend toujours du négociant.

4° A cause des matières précieuses que l'on confie aux horlogers et joailliers, leur travail est mieux récompensé par cette raison [que] le médecin et l'avocat.

Si une personne n'emploie que ses propres fonds alors il est évident que la confiance va [ ]. *p.10*

5° Si vous mettez votre fils chez un cordonnier vous êtes sûr qu'il apprendra à faire un soulier, mettez le chez un avocat il est très incertain qu'il apprenne la loi au point de gagner son métier.....Les comédiens gagnent beaucoup parce que leur état est difficile et deshonorant.

Les compagnies d'assurances gagnent peu parce que les hommes espèrent beaucoup dans leur bonheur. Les compagnies d'assurances sont des loteries inverses. Sur 99 il n'y en a pas une d'assurée.

Le prix des ouvriers à Londres est double qu'à Edimbourg.

Des 5 circonstances qui font varier le salaire du travail, il n'en est donc que 2 seules qui affectent le bénéfice des fonds : 1° L'agrément ou le désagrément de la profession, 2° le risque ou la sécurité qui l'accompagne. C'est principalement cette dernière partie qui influe sur le bénéfice du

fond.....Le bénéfice du fond varie moins
que le salaire du travail.

Il ne faut pas confondre le bénéfice du
255 fond avec le salaire du travail qui sont souvent
mêlés —— mémoire d'apothicaire, dit-on prover-
bialement, mais c'est qu'outre le bénéfice du fond, l'a-
pothicaire est obligé de faire rentrer son salaire
qui, vu son éducation et sa peine, doit être
260 considérable —— *p.11*

Un homme fait-il valoir un petit fond de 40 livres
sterling, il doit gagner 50 ou 60 %
parce que son salaire est confondu avec le
rapport de son fond. Fait-il valoir
265 10,000 livres sterling, il en retirera à peine 8 ou
10 %, parce que relativement une si
grande somme son salaire est nul.

L'on ne peut pas calculer le gain d'un homme
à spéculations, qui s'enrichit ou se ruine au gré du
270 sort. Cet homme là n'a pas de commerce fixe.
Il varie sans cesse.

Le bénéfice du fond varie selon
le prix des denrées qu'on le destine à
produire.

275 En général il est vrai de dire que
la même somme d'industrie annuelle
produit le même bénéfice de fond.
Cependant une année de deuil produit un
accroissement de prix du drap noir.
280 En agriculture, avec les mêmes dépenses
de culture l'on obtient une grande
différence de denrées.

La police réglementaire de l'Europe
produit une grande inégalité dans
285 le prix de l'emploi du temps et des fonds. *p.12*

Elle fait naître cette inégalité par
3 moyens ; 1° en réduisant dans certaines
corporations le nombre des concurrents. 2° En
le portant dans d'autres emplois au-dessus
290 de ses bornes naturelles. 3° En obstruant
la libre circulation des travaux et des
fonds.

Le laboureur et le cultivateur est supérieur
par l'intelligence à la classe ordinaire des
295 artisans. *p.13*